

〈資料紹介〉室伏クララのために

大橋 毅彦

戦時下のいわゆる汪兆銘「偽政権」の発足から、日本の敗戦と国共内戦を迎えるまでの南京と上海で、草野心平や堀田善衛らと関わりを持った女性¹室伏クララ（一九一八—一九四七）とおぼしき人物を登場させた小説が、最近になって刊行された。林京子の『予定時間』（講談社 一九九八・一一）がそれである。

いまはもう九十歳に手が届く「わたし」が、新聞社の特派員として上海で過ごした戦時中から敗戦後三年間の歳月を回想するスタイルの作品だが、この記憶を遡る旅の中で、自らの揺るぎない「性根」を求めていた「わたし」の前に、「リタ」という女が現れる。「北京語は『支那人』よりうま」く、「父親は経済学者で、彼の著書をわたしも読んでいた」というくだけりから

始まる、作中の彼女のプロフィールを追っていけば、川鍋東策の文章²などを通じていくらかはその閨歴を知る者は、評論家およびジャーナリストとして数多くの著作を持つ室伏高信の娘で、中国語に関する才能を生かし、その方面での訳業でも一定の仕事を残した室伏クララのイメージを、ごく自然に思い浮かべるのではないか。川西政明『昭和文学史』中巻（講談社二〇〇一・九）における室伏クララに関する叙述³は、おそらくは氏がこの作品から得た、「リタ」とクララとの距離をかぎりなく零に近づけることが可能だという判断をもとにして、敗戦前後の上海における室伏クララのたどった生の軌跡を逐一検証しようとする態をとるものだが、私はそれよりはむしろ、この小説の中にこうしたモデル詮議を惹起させる危険を冒してまで

も「リタ」なる女性を登場させようとした、林京子のモチーフなるものを重視したい。

思うに、それは「リタ」とそのモデルとなった女性に対する林氏の愛だと言ってもいい。作中の「わたし」の目と心を借りて林氏は、「己の心に忠実な女」「純粹な女」リタ像を掴み取るうとする。それをもって男たちが口にする「カルメンのような女」という風評、そしてまた「亡霊のように人を操る『罔』」に立ち向かわせていく。その結果、「満足して逝っ」たりタの竹の入った壺は、「わたし」と彼女の両親の視線に囲まれ、「閉められた雪見障子」から射し込む冬の陽を受けて「ぼんやり乳色の光」を放つのだ。探偵的なまなざしとは違って、日本と中国とが抗争する時代の渦に巻き込まれ、周囲の者に誤解されながらもなお、誠心誠意その時代を生きていこうとした女性に対する敬愛が核となったこの小説は、私をして室伏クララの生と付き合ってみたい促しとなった。

いまここに、戦時下上海で刊行されていた邦字新聞と詩誌とに発表された、室伏クララのエッセイと詩がある。資料紹介のかたちをとりながら、彼女の息遣いにいくらかでも触れてみたい。

* * *

まず一つ目の資料は、一九四二（昭和一七）年二月二二日・二三日の『大陸新報』第一千百三十六号と一千百三十七号に発表された随想「上海にて（上）（下）」である。この作品が載った第四面には、草野心平の連載小説「方々にある」が村尾鞠子の挿画入りで両日とも掲載されているほかに、シンガポール陥落直後の時局を反映して「大東亜戦週間日誌」・「攻略地解説 地上の楽園バリ島」・「今昔物語 獅子王の統治する町 敏性 シンガポールの由来」などといった記事も並んでいる。

内容の紹介に入るが、この随想は南京から上海に移り住んで二月が経過した折の心情をつづったものである。一九四〇（昭和一五）年十一月七日の『大陸新報』第六百六十九号に載った記事に従えば、二十二歳の室伏クララが南京に到着したのはその年の十一月一日（あるいは二日）、爾来父の知友である林伯生のもとで南京「国民政府」宣伝部の一員という位置にあったのだが、いまはその地を去り、上海へとやって来ているわけだ。この作品を読んだ印象を一口で言えば、「窓に始まり窓で終わる」文章、「窓辺の散文詩」だといえよう。すなわち「けふの日曜もたうとう部屋にこもったきりです」した——そんなこ

とをかながへるともなくかながへながら、わたくしはだまつて四角い夜の窓とむきあつてゐた」という文をもつて始まり、「いまかうして暗い夜の色のなかに、わたくしはじぶんの生活の遠景をながめる。こゝろではやはりきしむやうなわびしさがあり、ふつと、せめてものこと、雪でも降れ、などおもふ。まつしるな雪ひらかさなりながれてとんで、せめてこの窓はつばつの緋にでもなつてみせてくれなどおもふ」という一段で閉じられていくまで、室伏クララの表現は、囁目の風景としての窓と、窓を入り口として広がる自己の内側の風景との間を行きつ戻りつしながら、さまざまな感情を明滅させていつている。

それらの中には、南京で開かれた還都一周年記念式典の日の夜を回想するくだりに出てくる、「わたくしはもうどうしても和平建国でなければいやになつた」というような、時局のバイアスのかかった感激や精神の昂揚も見られるのだけれども、それにもまして強く伝わってくるのは、さまざまにきしむ現実に突き当たって心の安らぎや温もりを得られていない、孤独な魂のかたちである。上海の夜の窓辺で生じた南京(和平建国という理念)への郷愁も、じつはこの何かにすがりつきたくなるような寂寥を発条としていると解されそうだし、そうしてその寂しさは、自らの孤影に見合った南京の小学校の屋根裏部屋の

「をんなのひとの姿のちらつく窓」や、「窓とむかひあつたわたくしのかたはらにときをり佇んでく」れ、「すこしお酒に酔つたりなどすると、自分は漢奸ぢやない、など言ひだしたり、激しく泣きじやくつたりし」た人の記憶を、何度も押し寄せる波のように招き寄せていく。以下、「上海にて」の全文を示そう。

上海にて(上)

室伏クララ

けふの日曜もたうとう部屋にこもつたきりですごした——そんなことをかながへるともなくかながへながら、わたくしはだまつて四角い夜の窓とむきあつてゐた。わたくしのひざは窓の下側の剝げかかつた壁にくつつきわたくしの顔はちよつとごめばすぐぢかに冷たいガラスにこちんとつく位置にあつた。

窓の下はどこまでも支那家屋の屋根また屋根、どれも長屋みたいで、瓦葺きのその屋根には揃ひもそろつて高いところに長方形に突き出た灯とり窓がある。夜になると、その屋根裏部屋には薄黄いろい灯がとまり、あれは阿媽か何かだらうか、髪をもさもさにした頭とそれからときどき高くさしあげられる手とが見られた。にゆうと窓の輪郭の中に伸びあがつた手はふきんなどほしてみたりまた窓の戸が風ではたんといかないやうに樺

切れをもつてしんばり棒をかつたりする。

わたくしはそれらをながめてゐた。

上海に来て、ふたつき。

なんきんにゐたころは、あれほどまでに来たかつた上海であるけれど、住んでみればけつきよくどこだつてたいした変りはない『孤独とは』ほんたうに『○○』の判読不能 大橋注 以下の判読が困難な箇所も○で示す) 的条件ではない。』のか。わたくしの生活はやはり旧態依然、わびしきかぎりである。

なんきんでも、わたくしはよくこのやうにして窓とむかひあつたまゝ時をすごしたものであつた。なんきんの窓のむかひは小学校になつてゐて、その灰色の建物は昼のひかりのなかでは薄汚れてなんの感激もないものだつたが、夜になると、急に目を醒ましでもしたかのやうに屋根ちかい高いところと一列の灯がともつた。先生たちの泊つてゐる屋根裏部屋の灯で、わたくしはよくその灯りとむかひあひ、その一列の窓の灯をひとつふたつとかぞへたものであつた。向つて左側から一番目と二番目とは、夜遊び好きで、もあるのかよつぽどおそい時間でないと灯がともされなかつた。をんなのひとの姿のちらつく窓は、をんなの先生の部屋であらう、ときをり窓の方の鏡か何かにむかつて髪を梳く姿勢をみせたりした。

そのころの、しんしんと骨まで痛むやうな、そしてときにわあつと誰かに呐喊してゆきたいやうなそんなぎりぎりのせつなさを、おもひだす。

それでも、そのころは、窓とむかひあつたわたくしのかたはらにときをり佇んでくれるひともあるにはあつた。まだとてもわかい支那のひとで、びくつと膨らんだ頬の横顔で月光光(おつきさま)のうたなど、うたつたりするひとであつた。

戦争がはじまつてからずつと、自分が放浪してきた支那の遠くの村々や、それらの遠くのひとたちについて、話してくれるときもあつた。訛りの強いぼつんぼつん、ときれがちな北京語であつた。このひとはうつくしいりつぱな散文詩を書くひとで、すこしお酒に酔つたりなどとすると、自分は漢奸ぢやない、など言ひだしたり、激しく泣きじやくつたりした。

東京の帝大に留学させようと言ひだしたひとであつたのに、いやがつて、日本語は六ヶ月も習ひながら覚える気になれなかつたのであらう。遂に『アノネ』と『サヨナラ』とそれから皮肉なあてつけととればとれる『マンシユウコク』といふ単語と、そのくらゐしか言へないのだつた。わたくしはいつも片言の北京語と、あぶなっかしい支那文の手紙とで、そのひととお話した。

上海にて (下)

なんきんでは、わたくしはしばしばそのひととともに和平建国運動の波のしたをどうどうめぐりし和平建国にあまりなれずきてゐたためでもあらう好んで懐疑に陥つたりし、いま思へば、そんなふうにしてわたくしは却つて支那のひとたちをまよはせるお手伝ひをしてゐたやうなものであつた。

上海の窓辺でわたくしたちはさよならをした。上海にきてみて、わたくしはいつのまにか和平建国の四字になみだをながすことをおぼえ、そのひとに対してもそれをだまつてゐられなかつたのである上海にくるときは、もうなんきんなんか帰つてやるものかとおもつてゐたけれど、いま上海でのわたくしは祈るやうに遠くのなんきんをみつめる。

なんきんでは、幼い子供たちが口々にうたふ和平歌があり、保〇東亜之歌があつた。上海にきてありありと目に浮ぶ風景。全国宣伝会議に列席した日のこと、林宣伝部長の涙に終つた激しい演説に、一堂に集つたひとたちはこぞつて高々と片手をあげ、和平反共建国の宣誓の声はこだましてひびいたあの日のこと。



それよりも、還都一周年記念の日の夜、中央ロータリーの広場にあつまつた無言の民衆の群、それらの藍の無言の群は、ラジオの拡声機から流れる口支兩國の国歌を凝つときき、東亜民族行進曲だのを凝つときき、プログラム全部が終つてラジオがなりをひそめてしまつたあとにまだ黙々とかたまつてゐた。

民衆のかたまつてゐるあたりには、頂きには汪主席の〇顔の描かれた飯作りりの〇が立ち、ふり仰げば、汪主席の肩のあたり、ちひさくきんのいろで星が光つてゐるのだつた。わたくしはもうどうしても和平建国でなければいやになつた。

その支那のひとだつて、行つてはしまつたけれど、上海の何処かに住んでゐるなら、こんな和平建国とはとはい街に住んでみたならわたくしのきもちもわかってくれるであらうし、離れてきたなんきんのためにかへつて祈りたくなるであらう。



窓のそとはくらい。わたくしはいつまでも窓にむかつて腰かけてゐる。

“この箇所「九字分判説困難」——四角い窓から、遠く工場
の煙突の煙りがたちのぼるのをながめ、わたくしは自分の生活
やその生活の〇〇を〇〇にうかべた——これはその支那のひ
とが私の窓辺でしるした文学の最初の言葉である。”

いまかうして暗い夜のなかに、わたくしはじぶんの生活の遠景をながめる。ころろではやはりきしむやうなわびしさがあり、ふつと、せめてものこと、雪でも降り、などおもふ。まつしろな雪ひらかさなりながれてとんで、せめてこの窓ぼつぼつの緋にでもなつてみせてくれなどおもふ。

* * *

次いで紹介したいのは、「亜細亜」創刊号（一九四四・七・五）に掲載された「繁星の下」と題する詩である。

奥付によれば草野心平が編輯兼発行者、しかし実際の編集は詩人の池田克己に拠った「亜細亜」は、「中華民國在住の全日本詩人」の糾合を旨して戦争末期の上海で生まれた詩誌で、通巻三号まで続いたらしく、また川鍋東策の記憶によればこの創刊号のみならず、第二号にもクララの詩「私の骨が机に向つているそのかたち」が登載されたとのことだが、現在この雑誌の現物は創刊号のみが、いわき市立草野心平記念文学館に所蔵されていて、その内容を確かめられる。参考までに、「亜細亜」創刊号の目次を掲げてみる。

『亜細亜』創刊号目次

草野心平	大白道	二
黒木清次	伝令	四
朝島雨之助	雨に暮れる油公司草原	六
緑川昇	生命の歌	九
岩井五郎	海と石子陵	一二
中里廉	花の章	一三
室伏クララ	繁星の下	一四
兼松信夫	市	一五
池田克己	壮行	一六
上路忠雄	溶岩	一八
小林定治	漢口の夕暮	一九
川鍋東策	手紙	二一
詩のころざしに就て	朝島雨之助	二三
『詩領土』の創刊を祝ふ	緑川昇	二七
我が戒律	黒木清次	二九
編輯後記	池田克己	

草野の詩「大白道」を巻頭に置き、以下「上海文学」とも関

わりを持つ在瀨日本人詩人を中心とするラインアップを組んで創刊されたこの雑誌を支配するものは、いくつかの例外を除いて、いわゆる大東亜共栄という幻影の祀られた祭壇に向けて《詩》を奉げていこうとする精神であったといえよう。「私は亜細亜大陸の草莽の微臣としての日常を、『詩』と『志』と『死』を直通する『日本の詩精神』によつて推進せしめ、卑小な自身を常に国家最高の道に連ねつつ勉強して行きたい」（朝島雨之助「詩のころざしに就て」）という声高な宣言と対応すべく、「神々の無韻の声」や「悠久の大義」（「生命の歌」）、「民族万葉の花」（「日本の朝」）や「同生共死」（「漢口の夕暮」）といった言葉が、掲載詩群の中では書き連ねられている。詩人の使命は聖戦完遂のためにあるという熱情は、「殉国の血」（「日本の朝」）のイメージを引き寄せ、さらにそれは「鮮血の溶岩」（「溶岩」）と化して「爆発」「噴火」していきもする。

さて、このような感情の高ぶりと比較するとき、室伏クララの「繁星の下」は比喩的な意味においても、また作品が暗示する世界それ自体の印象としても、前者が放射するそうした熱度を冷ましていく、ある冷え冷えとした透明感と硬質感に支えられた作だといえよう。「南京広州路」という副題を持つこの詩は、冬夜「だれもゐない道」を洋車に乗って行く折の思いを歌っ

たものだが、そこに広がる空間には、外部世界が迫りくる雑音とやらは聞こえてこない。「道は凍つて一本」という言葉でもって現れてくる夜更けの「道」は、「軍靴のひびき」（「生命の歌」）が生じ、「万歳どよも」す出征劇（「壮行」）が繰り広げられる道のイメージをきびしく排除している。在るものはただ、孤独に張り詰めた魂が、自らを包んでいる天地と静かな交感を行っていく動きばかりである。道端に佇むも実際には嘶いたりしない馬の嘶きを心の耳で聞きなし、それに答えて「後ろ遥かな天蓋」で数多の星々が「リリリリ」と鳴るのをこれまた感じ取っていくという、ひっそりとしてせつない、たった一人の喪妾が、いま異郷の地にある日本人女性の心の中で行われつつある。そして、そのような情感を収斂する役目を持つのが、作品のタイトルにも用いられ、本文の掉尾を飾りもする《繁星》という詩語なのではないか。みずみずしいきらめき、せつない華やぎを持ちつつ、すくくと立ち上がっているこの言葉には、おそらく「予定時間」の中の表現を借りるなら、人間の生の基本的条件が脅かされる状況下にあつて「私も私でありたい」という思いを貫こうとした、詩人としての矜持が結晶しているように思う。

このようにして、クララの《私》を伝える「繁星の下」は、戦争協力詩が跳梁する時流に抗して《詩》の砦が守られていたこ

とを証する、ささやかだが注目すべき作品としての位置を獲得して行くのである。

繁星の下 —— 南京広州路 ——

室伏クララ

道は凍つて一本。吹き消えさうな洋車の燈に身をすくめて乗つてゐる。梶樞にあたるラムプのことと車夫の黒い背中がいそぐ。だれもゐない道の遠さ。

馬がゐる

灰白く仲間たちだけが支那馬の群

ひづめ凍らせても更けてゆく夜のまま

なんだか

あれたちがいなくなきやうな

いなくなきやうな

空気のふるへ

後ろ通かな天蓋でも

答へて

リリリリ 星々の数が鳴るやうな
いつかあれたち空駆ける馬となり
やがて静まつた星座に映す白い影

残されて道端に立ちつくす姿だけが東雲を待ち東雲を待つ

車夫の肩のあたり いつしんな動きやう

ひと恋ひしくみつめてゐる。はりつめた寒気の中

凝つと乗つてゆく。いつまでも。繁星の下。声のない道。

(注)

(1) 「田村俊子を戀る詩人たち」(『歷程』一九六八・六、一一)

(2) 同書p.188~191参照。

(3) さらにいえば、「I・Nに捧ぐ」という献辞が示唆するように、

匯山碼頭を離れる間際に見た、「暮れかかる薄闇のなか」でその「顔は闇を払って、輝いてい」た少女の記憶を宿しながらもうすぐ自らの生を終えようとしている、特派員として戦時下の上海で現実を懸命に追いつけてきた「わたし」と、その核となった

男性に対する敬愛も、この小説を支えている。

- (4) 草野のこの作品については、拙論「草野心平『方々にある』にみえる夢のきしみ」(『甲南国文』48号 二〇〇一年三月) 参照。また、上海における室伏クララと村尾絢子との交友については、三神伸彦「わがままいっぱい名取洋之助」(筑摩書房 一九八八・四) が、一九四二年春に太平出版印刷会社が発刊した子供向け月刊誌「新少年」の編集長にクララがなり、表紙と挿絵は絢子が担当したことを伝えているが、この雑誌は未見。

- (5) 「上海は堅実、南京政府に咲く大和撫子 室伏クララさんの弁」という見出し、クララのスナップ写真も入ったこの記事の全文は以下の通り。「国民政府宣伝部の一日として去る二日渡支早々若き身を戦後の日支文化提携のため活躍、首都南京政府に咲いた名花一輪として人気をさらつてゐる情熱の評論家室伏高信氏の令嬢クララさん(二二)が六日ひよつこり来滬した。彼女は東京女子大学在学中に父室伏氏の情熱に培はれて新生支那への強い憧れを持ち「大陸に骨を埋めても……」とまで真剣な決意を固めて父を口説くこと一年余、漸く許しを得て父室伏氏の親友の国民政府宣伝部長林柏生氏に宛てた娘クララを日支文化のために働かして下さい……との〇〇(判読困難)な書翰を一本携へて半身支那海を渡つて去る一日南京に着いたのである。

クララさんはアスターハウスで紫の支那服に若鮎のやうなピチピチした身体を包んで次の如く語つた。「船に乗つて初めて日本の地を離れた時には一寸センチになりましたわ、東京で北京語を勉強して来たんですけど、所によつて言葉が違ふんで困つてゐます南京の宣伝部は広東語が主ですから私は何が何だか見当がつかなくてマゴマゴしてゐる所です、上海は東京で考へてみた程派手ぢやないんですね殊に居留民の真面目な方には心から〇(判読困難)服しました」

- (6) 「草野心平全集第十二巻」(筑摩書房 一九八四・五) 所収「年譜」(長谷川涉編) 参照。

- (7) 注1と同じ。また、川鍋が紹介したこの詩句によつて、藤井省三が「淪陷区、上海の恋する女たち——張愛玲と室伏クララ、そして李香蘭」(四方田犬彦編「李香蘭と東アジア」(東京大学出版会 二〇〇一・一一) で推測する、武田泰淳の短編「聖女俠女」(『月光都市』所収 白井書房 一九四九・一) に登場する「マリヤさん」が室伏クララを核として造型されているとする見方を肯うことができる。すなわち、この作品に登場するもう一人の女性である梅女史によつて紹介される、「終戦の前の年の暮」に「マリヤさん」が「ある雑誌」に発表した詩句は、「私の骨が椅子によりかかっている、そのかたち」というものな

のである。

(8) 池田克巳・小泉譲・黒木清次らによって一九四三年に設立された上海文学研究会の機関誌。拙稿「〈資料紹介〉『大陸新報』瞥見」(『昭和文学研究』第39集 一九九九・九)参照。

(9) この詩の所在を藤井省三氏に報告したところ、氏から謝冰心の初期詩集に「繁星」があるが、クララが日本語になじみのない「繁星」をあえて詩のタイトルに用いた背景には、おそらくこの詩集の存在があるのではないかとという教示を受けた。その点も含めて、謝冰心の文学がクララに与えた影響に関する考察は後日の課題としたい。

(1001・11・17)